

鷹取の尾根の落葉をかきわけて紅茸狩りに興じたる日よ

戦中の苛しき日々を山深く共にこもりし頃し思ほゆ

木炭の乏しき冬は焚火して暖をとりつつ論議せしかな

教へ子を厳しき戦場に送りたる夕べは爐辺に無言にて坐す

長生寺その名の如く弥栄に君こそ居ませと祈りしものを

山梨・蓮華寺住職

(一九六八、六、二〇)

「過渡期」の台学者に贈る

疋 田 英 肇

昭和十三年大学は卒業したけれども、師父^{ちち}英恩日秀上人を喪った私は、師父^{ちち}の身延時代からの学友であった望月日謙法主の勧告に従ひ、同年秋信行道場を出行すると共に日謙法主の会下に参ずる事となり、昭和十四年正月早々広島から笈を負うて身延山に登参した。朱田嶺秀総務の御話では、どうやら祖山学院を専門学校に昇格するので、学校へ勤めさすのが謙上法主の真意であり、それまで且く布教師となつて「身延教報」編輯に携っている様に命ぜられ、いはゞ教員と布教師の見習いの様な形で、当時の教師寮（東溪寮）に一室を与へられて住む事になったが、それは当時学校の教務主任であり、身延山布教師の筆頭でもあった松木本興先生の指導を受けさせ様という親心ある計ひであつ

た事が、後になる程判つて来た。引越蕎麦ならぬ引越酒を一升携えてお目見得に上った時、かねて布教師として名声高き松木先生の嚆矢に接した私の第一印象は、静堂と自ら号された様に、予想に反して誰もが感じたであろうあの寡黙沈静の風格から醸し出される独特の雰囲気であった。

「君は東大で西洋哲学を学んだ相だが、なぜ全く畑違いの勉強をしたんだね」誰もが私にする質問がやはり先生の第一問であった。私も亦誰にも答えて来た様に、

「私の師父は非常に進歩的な思想の持主で仏教の哲理を悟るには、むしろ西洋哲学を学んだ方が近道だ。わしはもう年老いた。お前は若い元気でやってみろ、これが明治初年の排仏毀釈の受難の中を戦いぬいて来た老僧等の意気込みであった。父はこの意気で関西でもかなり有名な布教育家となったが、私も是非父の後を継いで立派な布教師になりたい。よろしく御指導願います」とお願いしたが松木先生は

「人は私を雄弁家の様に言うけれども、私は本来訥弁なのだ。小僧の時肺を病んで苦悩した時代があった。内攻陰鬱な自分の性格を改める為には、大衆の前、弁論の庭に堂々と立つ事が一番よいと考えて努力したのだ。或時富士川の怒濤に立向つて弁を練っていた時、あまりに大声を發したので吐血したが、病気の故ではない、御祖師様の様に凡血を吐いて心身を清めたのだと自分に言い聞かせたら、それからは病気の事等忘れて弁論に勤しむ事が出来た。君は小僧の時からお父さんについて説教を習った相だから、今更私がとやかく言う事はあるまい。大切なのは布教法よりも布教魂だよ」

この有益な教導をうけ乍ら、私は自分の身の上を省みた。私も小学生五年の時広島県下少年弁論大会で優勝した事があった。それが中学四年の頃から肺を患い、若い盛りを反対に、内攻性の厭世的な因循者になり下つて了つた。父

も心配して中学卒業後一年間は仏学（ブツガク）に勤しむ様にと膝下で訓育された。或時、元政上人もかつて青春時代肺病を患はれて、厭世思想にとりつかれたが、龍樹日静上人の化導により、豁然と悟られたという伝記を読んで、自らも又深く悟る所があった。松木先生もやはりそんな事があったのかと思うと途端に親近感が湧いて来て、急に酒呑友達の様な心安さをおぼえて来た。須臾の間に一升瓶は空になった。君も相当にいけるんだというので、席を改めて、飲み直したが、若い私は飲めば飲む程多弁喧嘩な喋り役となり、松木先生は反対に益々ムツツリと聞き役にいられた。学生達が「ムツツリ呑平の松木どん」と渾名したのは、呑む程に酔う程に、内鑑冷然として、私は止観業を行じているのだよと言はんばかりに冷徹然と、或時は揶揄的な合槌を入れ、或時は批判的な皮肉を加える、底知れぬヘビー、ドラックぶりを言ったのであろう。

この乱れない酔い方は学ぶべきだと思った。酒の中道実相は「上戸は酒の毒なるを知らず下戸は酒の薬なるを識らず」で、之を薬とし之を毒とするも、自らの心の置処にあるとは知っていても、酔って来れば必ず乱れるものだ、だが松木静堂先生はその名の如く絶対に乱れない。それは或面から言えば、信者をして呑ませた甲斐がないと嘆かしめ或は又学生をして「ムツツリ呑平」と渾名せしめる様な缺点であったかも知れぬ。しかし、私は僧侶ですから不飲酒戒を守ってお酒は頂きません。たゞ精進湯（セイジンユ）（禪では般若湯と言う相な）を飲んでゐる丈ですと言はんばかりの平然たる大悟徹底振りには並大抵の修行で会得出来るものではない。これには何か秘法がある。私はこの冷静な呑ぶりを学ぶよりも、その秘密を探し出す挑戦的興味の方に意欲を感じたのである。

それからはしばらく御世話になった御礼にと度々酒席に誘ったが、先生を酔はすには私の資力の方が続かなかつた。昭和十四年の暮、学校の内情も漸く判り、布教の方も慣れて来た私は本年中御厄介になった御礼というので、松

木先生がもうよいというまで酒を出すと、いう条件で酒席をもうけた。その日は教務も布教事務も皆片付いた日であったので、先生も中々陽気で一体どれ位徳利が並べられるか、空徳利を並べて見ようと二間ある壁へ空徳利を端から並べた。元々酒はあまり強くない私は徳利が一間位並んだかと思はれる頃から、調子のはづれて行く自分に気が付いた。言語は曖昧となり、論理の呂律が廻らない。話の内容が六ヶ敷い台学の話である丈に一層酔いも早かったのである。ついに私は沈没して了ったらしい。フト目醒めて、テーブルの彼方におぼろげ乍ら、何か冥想に耽りつゝ、相変らず盃をなめて居られる沈鬱な静堂先生の表情を眺めた時、「過渡期の台学者」の横顔を見たのである。

明治時代は日本基督教化時代と言える。王権神授説を模倣した明治政権は、廃仏毀釈をあえてした。「十善の君」「天子の法位」にある御年わづかに十六才の明治天皇から、数珠を奪って剣を握らせ、法衣を剥いで軍服を着せ、大元帥と祭りあげて、神聖ローマ帝国の後継者を以って任ずるルイ十四世や、カイゼル、ツアーを真似しめたのである。この唯一絶対主宰者の元で彼等は帝國主義の悪業の限りをつくしたのである。寺院の財産は強奪し、法隆寺の五重の塔をわずか十五円でフランスに売ろうとした事さえある。この帝國主義の圧迫下で仏教も又基督教理化して行った。と見てよろしい。特に驚くべき事は、「本仏」等という觀念は殆んど用いられていない。日蓮上人の教えに反して、「本仏」思想がエホバやアラアの如く日蓮宗教学界を横行し、十界互具の本尊をば雑亂勧請と罵り、ついに天皇本尊論まで飛出す様になった。地道に天台日蓮の正統教学を学ぶ者にとっては真に驚天動地の時代であった筈である。「夫れ國は法に依つて昌え、法は人に因つて貴し」という立正安國の人も國民ではなく支配的為政者だと解されやれ法主國從だ國主法從だ等と、弁証法的思索さえ出来ない輩が、堂々と街学的屁理屈をならべたのが明治時代であり、人間は一種の動物だと邪見して、本能と物欲を恣にしたのが、大正昭和である。この様なマテリアリズムの細

胞等やプラグマティズムの道具共には高邁なる教学は所詮馬の耳に念仏にすぎないだろう。純信な善男善女と法悦を共にする布教生活の方が先生の樂う所であった。今編集者が松木先生の遺稿を集め様と努力しても、布教原稿は集められても、學術的論文は見出せない筈だ。滔々たりし帝國主義の時流の中にも、戦後のパージ生活の中にも、又身延山教学部長という重責の中にも、過渡期の台学者は、深く自己の学解の中に沈潜する以外に、日本のどこにも止観道は見出せなかったであろう。私は静堂先生との三十年の交遊の中で、先生のこの横顔を充分理解した筈である。晩年私等を驚かす様な皮肉な言動、例へば「千本杉を切って売らなければ虫に食はれて了う」「修法師が豆を炒る様に木劍を敲くのが護法運動ぢやあるまい」等と物議をかもし、大いに周章狼狽さされたのも、この沈潜せる横顔がフト正面を向いたにすぎないのだ。

然らば台学は一体何処へ渡って行くのだろうか。ライシャワー博士が日本天台の、特に慈覚大師円仁の研究者である事は有名であるが、私は、昨年信行道場で日蓮教学を教えたカリフォルニア大学研究生のシャンエガーさんからあの著名なシュヴァイツァ博士に、日蓮上人についての著作があるのを見せられて驚いた。

彼は正確にも、「日蓮上人は一切衆生悉有仏性を説く法華天台の正統なる学者にして、或種の汎神論者である」と説いている。島国根性の排他的な日本人には、仏教は外来教であり、日蓮上人は諸宗を排斥した僧の様にはか写らないであろう。本化の大教日本国に充治せん事を願うた布教師の静堂先生！日本国には充治せずとも、一天四海皆歸妙法の世界には充治しつゝあるではないか、以て冥すべきである。願くは静堂先生の覚位、靈山の雲の上より兜術として照覽せられん事を、南無妙法蓮華経。